
『ソラ』の旅～青雲編～

徳次郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

『ソラ』の旅〜青雲編〜

【Nコード】

N9210B

【作者名】

徳次郎

【あらすじ】

営利目的の為には手段を選ばない悪徳ブリーダーは各地に存在する。そして、人気を無くして売れ残った大量の犬が殺されている事実がある。そんな運命を乗り越えた一頭の仔犬は、人間に恨みを抱いたまま成犬となり、容赦なくその牙を剥く。『彼』には人間の言葉を理解し話すことができた◆◆ある日、散弾銃の弾を浴びてしまったその犬は、一人の少女に救われる。人間に深い恨みを抱いた『彼』は、少女の身に危険が迫った時、はたして立ち上がるのだろうか……【続編】ですが、話は過去へさかのぼります。

◆1◆（前書き）

『ソラ』の旅の続編ですが、話はさかのぼり『ソラ』の過去を描いた作品です。

◆1◆

― 199X年 ―

その広い敷地には、鉄製の幾つものケージが無造作に積み重ねられていた。最初は向きを考えていたようだが、今となってはめちゃくちゃで、場所によっては斜めに積み上げられて今にも崩れそうだった。

山を切り開いたこの土地は、周囲は緑の木々で覆われている。

小さなプレハブ小屋から出てきた男が、混み合ったケージを眺めながら、タバコに火をつけた。

「とつと引き払わんとヤバイな」

男は呟きながら、足元のケージに片足を乗せた。

男の携帯電話が鳴った。

彼は、着信モニターを見ると、「チッ」と舌を鳴らして電話に出た。

「ああ、判ってますよ。直ぐに処分します。はい、クスリを使います」

男は面倒くさそうに敬語を使っていた。

「大丈夫です。動物愛護団体なんて、どうせ事が終わってから騒ぐのがオチですよ」

タバコを啜えた男の口元が引き攣ったように上向きに動いた。

男は電話を切ると、片足を乗せていたケージを思い切り蹴飛ばして、再び携帯電話を開くと、今度は自分から何処かへ電話をかけた。「俺だ、今夜やるぞ。もうここは水も止められた。一気に片つけな」と、何かの拍子に気づかれたら面倒だ」

男は話しながら、プレハブ小屋に姿を消した。

「どうやら、今夜私達を殺すらしい」
大きなハスキー犬が言った。

その背中の毛色は、普通のグレーよりも明るく、むしろ銀色に近い。

「とうとう皆殺しか……」

同じケージに入れられている耳の大きなビーグル犬が、眉にしわを寄せながら呟くように言った。

「何とかこの仔だけでも逃がしたいわ」

大きなハスキー犬は、足元の仔犬の匂いを嗅ぎながら言った。

「母さんも一緒に逃げよう」

仔犬は母親を見上げた。

「私は無理だわ」

「あんたも、目さえやられなければなあ」

そう、大きな母犬のハスキー犬は目が見えない。

一週間前にここを抜け出そうとして管理人の男に見つかり、捕獲された時に両目を傷つけられてしまったのだ。

そして、仔犬の父親は死体となって、少し離れたケージに他の骸と一緒に詰め込まれている。

ここは、あるブリーダーの飼育小屋だ。幾つかの飼育小屋を辺りな場所に設けて、流行の犬を繁殖させる。

人気が無くなってあまった犬は、餌代などの経費節減の為に、次々に処分される。

そして今、シベリアンハスキーの流行が下火になって、このメインだった犬が根こそぎ処分されようとしていた。

今回でここは放棄される。

他の飼育小屋で増やしたゴールデンレトリバーに絞り込んで、経費を削減する計画なのだ。

母犬のハスキー犬は人の言葉が完全に理解できた。そればかりか、

彼女は人に話しかける事が出来る。

大量に繁殖させる生き物は、その中で時折突然変異が起こる。それは、小指の骨が欠損していたり、片方の目が見えなかったり、耳が通常よりも短かったり。

全身が真っ白だったり、真っ黒だったり……

それはたいてい悪い方へと姿を現す。

しかし、ここにいる母犬のハスキー犬は生まれて間もない頃から人間の言葉を吸収し、学習する能力があったのだ。おそらく大脳皮質に、何らかの異変があるのだろう。

それが、本当にいい方の突然変異と言えるかどうかは判らない。

知らぬが仏。そんな言葉もあるほどだ。

その能力を使って、母犬は、先週はこのアルバイトにケージを開けさせたのだ。

しかし、運悪く責任者が車で戻ってきて、大捕り物になってしまい、挙句の果てには母犬は両目を失い、父犬は命を失った。

「俺たちの仲間は、目の見えない人間を助けてるって言うのになあ」
ビーグル犬が呟いた。

「目の見えない人を助ける犬がいるの？」

「ああ、盲導犬って言うんだそうだ」

「僕らの仲間は目の見えない人間を助けているのに、人間は目の見えない犬を助けてくれないの？」

仔犬は言った。

「人間にそんな事を望んでも無理な話さ」

ビーグル犬はそう言って、前足に顎を乗せると、上目遣いに仔犬を見た。

「でもね、いい人間もいるから、人間そのものを怨んじやいけないよ」

母犬は、仔犬の身体を舐めながら

「それにね、太古の時代から、私ら犬は人間のパートナーとして、彼らを助ける事を喜びにして来たんだよ」

「そんなの嘘だ」

仔犬は叫んだ。

「嘘じゃないさ。ここから運よく買われていった連中だって、殆どは人間の喜ぶ顔を見ながら幸せを感じてるんだよ」

「まあ、それが俺たちの本能だからなあ」

ビーグルが再び上目遣いで仔犬を見上げた。

「なんか、人間で勝手だね」

仔犬はそう言いながらあくびをして、床に丸くなると

「お腹すいたなあ」

そう呟いて、黒い鼻をピクリと動かした。

「もう、私たちには何も出ないよ」

「今夜って事は、そうだろうな」

ビーグル犬は、そう言って目を閉じた。

晴れ渡る夜空には、無数の星が瞬いていた。遠くに輝く小さな三日月よりも、星明りが森を照らすような夜だった。

三人の人間の気配が近づいて来て積み上げられたケージの端で犬の吠える声がすると、それは瞬く間に連鎖して敷地一帯が犬の鳴き声に包まれた。

ケージを開ける音と共に、仲間たちが暴れる姿が暗闇に映った。

仔犬の大半は安く売り払われたが、それでもかなりの犬がケージに残っている。成犬になってしまった犬から次々に薬を注射された。

「ちゃんと押さえておけ」

「何だか、気が引けますね」

「大丈夫だ。筋肉を麻痺させる薬だ。苦しまずに死ねる。俺だって、少しは良心があるからな」

「はあ、どんな良心ですかね」

「いいからしっかり押さえておけ」

吠え盛る犬の声とケージを揺らす音は、次々に減っていった。

そして、気配が近づいてくる。

隣のケージを開ける音がした。

成犬のハスキー犬がいきなり一人の男に飛びかかった。

彼もまた、買い手が付かないまま成犬に育ってしまった一匹だ。

「うわあ」

一人が叫んで、もう一人は必死に捕まえる。

管理人の男が、一瞬で注射器を犬の首根に差し込んだ。

「ビビッてんじゃねえよ」

「すみません……」

母犬のハスキー犬はその全ての様子を観察し、会話を聞き取って一番狙いやすい男を決めていた。

「どうするの？」

小さな声で、仔犬が言った。

「私が気を引くから、その隙にお前はお逃げ」

「母さんは」

「私はいけないよ。ソラ。お前の名前はソラだ。この大空のように大きくおなり」

「ソラかぁ。いい名だ」

ビーグル犬が囁いた。

その時、ケージのカギの開く音がした。

母犬は嗅覚と気配だけを頼りに、様子を伺う。

ケージの扉が開いた瞬間、母犬は飛び出した。

「うわぁ」

「バカヤロウ」

母犬は一番弱そうな男の腕に噛み付いた。

「ソラ、早く行きな！」

「ヤダ、独りはヤダよ」

「強くなるんだソラ。独りで行くんだよ」

母犬は、他の二人の男に捕まらないように頭と身体を大きく振った。

「こいつ、おとなしくしろ」

「目が見えないくせに」

「痛てえよ、早く何とかしてくれ。手がちぎれる」

「クソッ、早く捕まえろ」

一人が母犬の頭を捕まえた。

「ソラ、早く逃げなさい」

母親に注射器が刺し込まれそうになったその時、ビーグルが男の手に飛び掛った。

「イテテテテ！」

「ソラ、早く行け。行け！」

ソラは走り出した。暗黒に包まれたような森に向かって全力で走った。

……ソラ、人間を怨んじやいけないよ。イイ人間だって沢山いる。誰かの力になってあげなさい。それが、お前の喜びになるはずだよ。沢山の犬たちの叫び声が遠ざかってゆく。その叫びが一つ一つ確実に減ってゆく。

ソラは背中を感じていた。

ビーグル犬の命の気配が消えた事、そして、母親の呼吸が消えていく事を。

「一匹小さいのが逃げたぞ」

「仔犬じゃ、森を抜けられない。ノタレ死ぬだけだ。放っておけ」
微かにそんな会話がソラの耳に聞こえた。

ソラは振り返らなかった。

無我夢中で暗闇を切り裂いて走った。星明りは彼にとって充分な明かりだった。草むらを抜け、切り株をかわして木の根を飛び越えた。

湿った土を思い切り蹴飛ばして、黒々と茂った闇の中をただひたすら走った。

方角なんて判らない。

ただ、仲間たちの命が消えてゆく気配を振り払いながら、今まで暮らしたあのケージのある敷地から遠ざかるだけだった。

「復讐してやる。絶対復讐してやる。復讐してやる」

ソラは心の中で何度も呟きながら、その怒りを走るエネルギーに変えていた。

「絶対、人間共に復讐してやる。僕は人間を絶対に許さない」

星明りに照らされたソラの右眼はヒスイのように青く、左眼はエメラルドのような瑠璃色に淡い光りを放っていた。

秋になると、狩猟区域の山々では散弾銃の音が木霊する。

猟師たちは、スポーツ、または娯楽として森の獲物を見定めて狙い撃ちし、各々に自慢の笑みを浮かべる。

「今日は、天気もいいし狩猟日和だな」

男は車から散弾銃を取り出して、二人の仲間と山へ入って行った。それを静かに見つめる瑠璃色の輝きがあったが、人間にはその気配を感じる事は出来なかった。

「なあ、熊もこっちに出てきたら撃っていいんだろ」

「向かって来たらな」

「そんなの、誰もみてねえじゃん」

「ま、そう言うこった」

彼らの本当の狙いは野鳥ではない。熊や鹿を正当防衛と偽って撃ち殺し、剥製専門店に横流す。

「静かに行け。熊は意外に臆病だからな」

「その臆病者を撃つんだから、お前って酷い奴だな」

「お前こそ、後から留めの一撃だけして手柄を横取りすんなよ」

男たちにとってはただのゲームに過ぎない。

深い森の静寂の中に、枯れ草を踏む微かな音だけが響いていた。

ガサッと茂みを揺らす音がした。

男たちは一斉に身をかめて振り返る。

「いたぞ。ツキノワグマだ」

五十メートルほど先の木立から注ぐ木漏れ日の中に、黒い影が揺れていた。

三人の男たちは、静かに息を殺しながらそれに近づいてゆく。

二十メートル付近。パキッと、誰かが枝を踏む。

その音に熊は振り返った。

先頭にいた男は上体を起こし、瞬時に銃を構えて狙いを定めた。

息を吐きながらトリガーに指を掛けたとき、右の草むらから何かが飛び出した。

「うわぁ」

飛び出したそれは、銃を構えた男の腕に噛み付いた。

「なんだぁ」

後ろにいた二人も、突然の事で後ろにたじろぐだけだった。

「何とかしろ」

腕をかまれた男は、もがきながら後ろの二人に助けを求めた。

後ろにいた一人は、何かに噛まれてもがく男に銃口を向けた。

「バカ野郎、俺を撃つ気か」

その時振り回した男の腕が、噛まれた痛みで麻痺していたのか、自分の散弾銃の引き金を引いてしまった。

ダンッ！　ンッ、ンッ、ンッ……………

銃声が森を突き抜けて鳴り響くと、木霊が轟いて、鳥たちは木々を揺らして一斉に飛び立った。

男の腕に噛み付いていたモノは、瞬時に身を翻ひるがえして、出てきた反対側の茂みに消えた。

そして、噛まれたイタミに腕を押さえる男の目の前には、二人の仲間が血まみれで倒れていた。

「ついに、死人が出たか？」

「さぁね、どっちにしても人間を撃ったのは人間さ。バカな奴らだ」

「お前は どうしてそんなに人間を憎む」

「あんただって憎いだろう。命を狙われたのはあんただぜ」

「俺は、こっちから仕掛けるほど憎んじやないがね」

ツキノワグマはそう言って森の中へ姿を消した。

「礼だけは言っとくぜ。ありがとうよ。ソラ」

『野犬か、狼の生き残りか!?!』

新聞にはそんな見出しが出ていた。

秋の狩猟区の山で度々人が襲われた。俊敏な身のこなしで人を襲い、猟師たちの腕を狙って凶暴に噛み付いてくる。

襲われた者たちは皆、命は助かっているが、利き腕が使い物にならなくなって二度と銃を握れなかった。

「銀色の身体で、目が青く光ってた。あれはタダの犬とかじゃない」
「とにかくデカイんだ。やたらと素早くて」

「あれは、犬神さまだよ。山が怒ってるんだ」

秋の山々には、色んな噂が飛び交った。

地元の猟友会の仲間が集まって山狩りをする事が決まった。

隣県からも仲間が集い、山狩りは実施された。

ある者は地元の安全の為に、ある者は友人の敵を撃つ為に、そしてある者は興味本位か英雄気取りで集まった。

猟師を襲う獣は何時の間にか、フアング「牙」と呼ばれるようになっていた。

フアングは猟師しか襲わず、人里での目撃はほとんど無い。

ハイキングに訪れた家族連れがそれらしき動物を見かけているが、デジカメで撮る暇も無く身体を翻して森へ消えたそうだ。

狩猟区から絨毯式に搜索されたが、フアングの足取りは掴めなかった。

東京から動物学者が呼ばれて、搜索に加わった。

山狩りの人員は百人を超えていた。

噂を聞きつけた全国の猟友会からも助っ人が来たのだ。

それでも深い森が連なる山々の中で、一頭の動物を見つけることは困難だった。

断崖の頂からそれを見つめる目があった。

「ソラ、もういいだろう。この辺で身を引きなさい。さもないと、お前が人間に殺されてしまうよ」

後ろから声を掛けたのは、銀色の毛に覆われた日本カモシカだった。

ソラは、このカモシカに育てられた。

日本カモシカは天然記念物指定だから、一緒にいれば安全だった。「駄目だ。皆殺しには出来ないけど、一人でも多くの人間を傷つけて、僕はあいつらに復讐するんだ」

ソラは、遠くの森にうごめく人間どもの気配を冷たく見下ろした。「でもね、ソラ。お前は犬なんだよ。犬は、私らなんかよりもずっ

と人間の生活に近いところで生きるんだ。いや、人間と共に生きると言ってもいい」

「じゃあ、どうして人間は犬を殺すの？」

「確かに人間は勝手だけど、お前が一匹でどうこうできるものじゃないだろ」

カモシカは優しく光る黒い眼差しでソラを見つめた。

「ソラ、私についておいで」

カモシカはソラを促して、森に入って行った。

紅葉で彩る木々から落ちた木の葉が、獣道までもその色に染め上げていた。

小さな沢に沿って下り、再び木立の中を歩いた。

「オバサン、何処に行くの？」

「いいから黙ってついておいで」

小さな沼のほとりを過ぎて、ゴツゴツした岩の突き出た地形を登ると、数頭の日本カモシカがいた。

「おや、久しぶりだね」

一頭のカモシカが話しかけてきた。

「坊やも、ずいぶんとデカくなったもんだね」

「誰？」

ソラが訊いた。

「ソラ、足を見てごらん」

オバサンが、話かけてきたカモシカの足をソラに示した。

その足にはもうボロボロになった布切れのようなものが巻かれていた。白かったそれは、既に茶色に変色している。

「それ、何？」

ソラは、そのカモシカに訊いた。

「ああ、これかい。ずいぶん前に、足を折ってしまってたね」

「骨折したの？」

「ああ。でもね、人間が私を捕まえて手当てしてくれたのさ」

「人間が？」

「最初は殺されると思ったから、足を引きずってでも必死で逃げたさ。でも、ついに掴まって観念したら、添え木をつけて包帯を巻いて、身体を縄で固定されて」

カモシカはそこでフツと笑い声を出した。

「私も臆病だから、いったいどうするつもりだろうって、生きた心地がしなかったよ。でも、足の骨がくつついた頃に、再びこの森に放してくれたんだよ」

「そんな事をして、人間には何の得があるの？」

ソラは怪訝な顔で訪ねた。

「さあね、人間はほんと、理解不能な生き物だけど、悪い奴ばかりじゃないのは確かだね」

カモシカはそう言ってホホホツと笑った。

「判ったろう。人間にだって、きつといい奴はいるんだよ」

オバサンが言った。

「ソラ、噂は聞いてるよ。ずいぶん暴れてるそうじゃないか」

他のカモシカも寄ってきて話しかけた。

ソラは何だか、自分の信念が少しだけ揺らぐのを感じたが、仲間を大量に殺された恨み、そして母親を殺された怨嗟の思いは簡単には消えなかった。

紅葉の葉も落ちて、朝晩は霜が降り始めた頃、猟友会による山狩りは何の成果もないまま一端終止符を打った。

真夏の熱い風は、緑を通り抜けて山々を越えてゆく。朝露は太陽の陽を受けて、光りの粒となって森を照らしていた。

「あるぞ、やっぱり犬の足跡だ」

男は地面に顔を近づけて呟いた。

「さすが田口さん。目がいい」

「バカ、俺は感がいいんだよ。マヌケな猟師たちと一緒にすんな」

田口は大学時代の後輩だった室井を連れて、山へ入っていた。

実は、県と市の行政が協力して、ファングに賞金を掛けたのだ。

生け捕りなら百五十万、死体でも百万円を支払うと謳ったのだ。

賞金の告知をした春先にはかなりの猟師たちが山へ入って来たが、ファングの消息が全くつかめない為、賞金に踊らされた熱気は次第に冷めていった。

終いには、熊にでも喰われて既に死んでいるのだと言う者までいた。

しかし、田口は諦めなかった。

春先に何度か来た後、獣の足跡を徹底的に研究して、僅かな足跡でも見分けられるようになったのだ。

「でも田口さん、ライフルはヤバくないですか？」

「用心の為だ、使いはしねえよ」

田口は銃を所持する許可証は持っているが、猟師ではない。クレ―射撃などのスポーツ射撃専門だ。

だから、山の中に銃を持ち込んだり、ましてや勝手に発砲する事は違法だ。それ以前に、例えば猟師でも禁猟期間は狩猟区であっても銃を使ってはならない。

しかし、田口は素早く動く物を撃つ事に自信があった。

数年前には、クレ―射撃の全国大会で上位入賞を果たしている。

そして、今日彼が持参したライフルは、ターゲットスコップ付き

の強力なものだった。

田口は背中に背負っていたもう一つ、散弾銃を室井に差し出した。

「お、俺はいいです。銃なんて撃てないすよ」

「いいから持っておけ。護身用だ。お前だって、腕を喰いちぎられたくはねえだろ」

室井はそう言われて、渋々渡された散弾を受け取り肩に掛けた。

それを見た田口は、口の端を吊り上げてニヤリと笑うと

「これでお前も同犯だな」

陽は西に傾き、森の中はいち早くほの暗さを増していた。

田口と室井は結局決定的な収穫が無いまま、山を降りる途中だった。

その時、草木の生い茂った先の岩場に白い陰を見つけた。

田口は慌てて室井に身をかがめるように促して、自分も素早く林の中に身を伏せた。

彼は以前から考えていた。

これだけ捜しても見つからないのは、よほど賢く、こちらの動きを読み行動を悟られているからではないのか。

田口は林からそっと岩場を覗いた。

山の向こうから照らし出す夕日に、銀色の毛が輝いていた。

ライフルスコープを覗くと、はっきりと獣の姿が映し出された。

「なんだよ、ただの犬じゃねえか。何が犬神様だよ」

室井はすぐ傍の茂みから田口の様子を覗いながら、岩場に佇む獣の姿に見入っていた。

「どうするんです？」

室井が田口に向かって、小声で言った。

「ここから狙ってやる」

そう言って、田口は再びライフルを構えてスコープを覗いた。

「撃つのはヤバイっすよ」

室井は再び声を潜めて言った。

「こういうのはな、捕ったもん勝ちなんだよ」

田口たちは、獣の風下にいた。それはまったくの偶然で、それが二人を優位にさせていた。

田口が草むらからライフルの銃身を突き出して、立ち膝のままスコープに映る獣を見つめていた。

中心のドットに標的が入る。

……殺しはしねえ。後ろ足を狙ってやる。

呼吸を整えてトリガーに人差し指をかけると、静かに息を吐き出しながらその指を絞り込んだ。

ソラはこの時何も気づいていなかった。

夕陽は遠くの尾根に向かって傾いていた。

しかしその時、視界の端で一瞬何かが光るのが見えて、ソラは反射的に後ろ足で前方に素早く跳んだ。

スコープのレンズが夕陽に反射したのだ。

ダンッ！　ンッ、ンッ……

銃声が鳴り響いて、辺りの林から鳥たちがバサバサッと一斉に飛び立った。

「クソッ、外した」

田口は急いでボルトを引いて、次の弾丸を装填したが、もう標的の姿は無かった。

「何処行った」

田口は思わず室井を見た。

「いや、早くて判らなかつたっす」

「クソッ、役にたたねえ野郎だ」

その時、草むらを何かが揺らした。

茂った草むらの動きが、縦横に揺れて素早く移動した。

「いるぞ」

田口が声を出して、林の揺れを目で追った。ライフルのグリップを握り直したその時、いきなり何かが目の前から飛び出して彼の右腕に噛み付いた。

「うわあ、ちきしょう」

田口はライフルを手から落してしまった。

室井は、気が動転していた。

肩に下げていた散弾銃を手にして、田口へ向けた。

「バカ、ヤメロ、こんな所で散弾を撃つな」

室井の耳には届かなかった。しかし彼は、純粹に田口を助けようとしたのだ。田口の腕に噛み付いて離れない獣を狙ったのだ。

『早く撃て』

誰かの声が室井を急かした。

ダンッ！

再び銃声は森を駆け抜けた。

夕日は沈みかけて、辺りは夕間暮れに包まれていた。飛び立つ鳥の音が消えると、辺りは静寂に帰る。

「た、田口さん……ああ、どうしよう。俺は何て事をしてしまったんだ。すみません。すみません」

そこには血まみれの田口を抱き起こす室井の姿だけがあった。

小さな血痕が、森の中へ消えていたが、今それを追える者はいなかった。

琉美は夏休みに、陶芸家である祖父の家に来ていた。

丹下重三郎たんげじゅうざぶろうは、東京の銀座や渋谷の陶器専門店で品を並べる有名な陶芸家だった。

若い頃の作品が最近サザビーズのオークションで取引されて、全国的に、いや世界的に名を馳せる事になったほどだ。

人里離れた場所にある古い家は、土間があり、居間には囲炉裏がある現代からタイムスリップしたような装いで、隣接した場所には陶器を焼くための大きな窯がある。

琉美はそんな何時代だか判らなくなるような祖父の家が好きだった。

彼女の母親は嫌がったが、琉美が異常に來たがるので、夏休みには何時も泊まりで遊びに來る。

しかし、琉美が中学生になると母親は來なくなり、彼女一人で遊びに來るようになった。

一人で來るのは今年で二度目。もう完全に慣れっこで、洋服が汚れるからと言って、山歩きを嫌う母親がいないのは、かえって都合がいいくらいだ。

「おじいちゃん、川の向こうの鬼百合見てきてイイ？」

「ああ、氣をつけて行くんだぞ」

「大丈夫だよ」

琉美はそう言って、重三郎の飼犬である柴犬のブン太を連れて木立の中へ駆けていった。

重三郎はほとんど一日中ろくろを回し、窯に火を焚いて、そして土を捏ねて過ごす。

この日も、琉美を見送った後は、ろくろを回していた。
「こんにちは」

食事の支度を手伝ってくれている、和江がやって來た。

彼女は体格のいいオバサンで歳は四十代、この山のふもとの村に住んでいる。

彼女の母親が生前、住み込みで重三郎の手伝いをしていた事で、彼女もまたそれを次いだ形だが、和江は通いで昼食の仕度と夕食の下ごしらえをするのみだ。

「今日はまた暑いねえ」

手ぬぐいを頭に巻いた和江は、丸々とした笑顔で縁側から重三郎の仕事場を覗き込んだ。

「琉美ちゃんは何？」

「ああ、鬼百合を見に、ブン太と一緒に出かけた。そろそろ帰ってくるでねか」

「じゃあ、とっとと昼の仕度するべかね」

和江はそう言って、土間から繋がった台所へ向かった。

陽差しは一番高い場所から草木を照らして青々と輝かせて、セミの鳴き声が喧騒となって山を越えて鳴り響いていた。

重三郎は一息つくくと、縁側に腰掛けて、もう何十年も吸い続けている峰を取り出して火をつけた。

深く吸い込んで、大きく吐き出したその時、琉美の声が聞こえた。「おじいちゃん」

重三郎は、縁側に腰掛けたまま声のした外を眺めたが、琉美の姿はまだ見えなかった。

すると、ブン太と一緒に血相をかかえて彼女が走ってくるのが、庭の先の林の間から見えた。

「琉美、どうした」

重三郎は、自分でも驚くスピードで立ち上がった。

「おじいちゃん、大変なの」

「どうしたんじゃ、そんなに慌てて」

「いいから来て。早く」

重三郎は孫の琉美に手を引っ張られてサンダルを引っ掛けると、くたびれたサルのように駆け出した。

「おいおい、そんなに引っ張ったら転んでしまうが」

「早く早く」

それでも琉美は、重三郎の手を引っ張り続けた。
林の小道を抜けて、小川の丸木橋を渡る。

草の生い茂った獣道のような所を抜けると、ぽっかりと空洞のよう
うに開けた場所には小さな池があった。

「琉美、こんな所まで来たのか？」

「それどころじゃないんだってば」

琉美はそう言って「ほら、あそこ」と指を指した。

大きな木の根元にフサフサの獣が横たわっている。

「何じゃ、狼か？」

重三郎はそう言って、ゆっくりと警戒しながら獣に近づいた。

「違うよおじいちゃん。これ犬よ」

琉美は重三郎の腕を軽く掴むと

「たぶんシベリアンハスキーよ」

「なんじゃそりゃ。シベリア……？」

舌を出してお腹を揺らしながら苦しそうに呼吸するその犬を、重

三郎は覗き込んだ。

「怪我してるみたいなの」

琉美が言った。

重三郎は、暴れそうには無い事を確認しながら身体を乗り出して、
犬の身体を眺めた。

脇腹と、後ろ足の太ももに出血があった。

「どうしたんじやろう。間違って猟師にでも撃たれたか」

「連れて行こう。手当てしないと」

琉美が重三郎の腕を再び掴んだ。

「でもなあ、こんな大きな犬、わしゃ運べないぞ」

重三郎は、辺りを見回しながら考えていた。

「そうだ、琉美、ウチにネコが在ったべ」

「ネコ？」

琉美は一瞬怪訝な表情を浮かべたが

「ああ、一輪の荷車ね」

「あれを持ってくるんだ」

「判った。おじいちゃんは待ってて」

琉美はそう言いながら、もう走り出していた。

「お前、何処から来たんじゃ？」

重三郎は、犬の顔を見ながら話しかけた。

まるで、事故現場で救急隊員が怪我人を励ますように、琉美が荷車を持って来るまでの間、話しかけ続けた。

そんな彼の姿を、獣は薄目を開けて微かに見つめているようだった。

琉美は息を切らしながら、短時間で戻ってきた。

重三郎の傍まで来た時、勢いよく押しながら駆けて来た荷車が木の根に跳ね上がって、琉美の手から離れた。その拍子に琉美は転んで、荷車だけが重三郎の元へやって来た。

「おいおい、琉美、大丈夫か」

「えへへ、平気だよ」

琉美は立ち上がると、膝に着いた土を掃いながら笑った。

重三郎と琉美は二人がかりで犬を荷車に乗せようと身体に手をかけた。

グルルルル……

犬の鼻面に陰しくシワが寄った。

閉じていた瞳が一瞬開いたとき、瑠璃色の輝きが重三郎を睨んだ。

「おいおい、大丈夫じゃよ。お前の怪我の手当てをするだけだ」

重三郎はそう言って犬に向かって微笑むと

「でも、もし噛み付くときは、琉美じゃなくワシにしておくれ」

「心配いらないよ。ウチに運んで手当てするから」

琉美も犬に話しかけた。

重三郎が頭を、琉美は腰から下を持ち上げて荷車に乗せた。

ガタボコ道に気を使いながら、その犬を重三郎の家まで運んだ。

「重^{しげ}さん、何処行ってなさった」

和江が土間から出て来ると、荷車を見て

「どうしたんです？ それ」

「川の向こうで倒れてたんじゃ」

「ずいぶん大きいですね。狼ですか？」

重三郎は思わず笑って

「何とかっていう、外国の犬らしい」

「外国の犬ですか……」

重三郎と琉美が二人がかりで土間に犬を下ろす。それを丸い顔で、目を丸くしながら見ていた和江だが、直ぐに気を取り直して手を貸した。

「和江さん、獣医の吾朗、アイツを呼んでくれ」

重三郎が言った。

ふもとの村から少し離れた町よりの所に住む獣医の吾朗は、ブン太の予防注射に何時もここまでやって来てくれる。

和江は直ぐに居間に上がって、今時無いような黒電話のダイヤルを重そうに回した。

20分もすると、吾朗の車がふもとから伸びる細道をやって来て庭先に止まった。

「ブン太がどうかありませんでしたか？」

吾朗は車から降りると、直ぐに重三郎に声を掛けた。

しかし、ブン太は自分の犬小屋の前にチョコンと座っている。

重三郎は、吾朗を土間に案内した。

「こりゃ、でっかい犬だ」

「怪我をしてしまったな」

吾朗は、自分の鞆から医療道具を取り出して、傷口を診る。

「こりゃ、散弾の弾でも喰らったんだな。傷自体は大した事無いが、腹部が化膿し始めている」

「治るかのお」

重三郎は心配げに訪ねた。

「とりあえず、弾を取り出して、消毒して」

吾朗は真剣な顔つきでそう言うと、

「犬は回復力が強いから、大丈夫だと思います」

そう言って、小さく微笑んだ。

オペは直ぐに始められた。

この暑さでは、早く手当てをしないとどんどん化膿が酷くなる。

吾朗が麻酔を打とうと注射器を取り出した時、犬は力の限り身体を起こして、再び鼻面に深いシワを寄せて唸りをあげた。喉のずつと奥から響くような低くそれでいて鋭い声。そして両目を見開いて吾朗を睨んだ。

「大丈夫よ。麻酔して、傷口から弾を取り出すんだって。麻酔しないと痛いでしょ」

琉美が犬の頭に手を当てた。

重三郎は、さすがに噛まれやしないかと琉美が心配だった。

犬は、琉美の言葉を理解したかのように、唸りを静めて再び目を閉じた。

「凄い目だなあ。バイ・アイなんだね」

「バイ・アイって？」

琉美が訊いた。

「左右の目の色が違う事をいうんだ。ハスキー犬にはよくあるらしいけど、実際に見るとちょっと怖いね」

吾朗は笑顔で琉美を見つめると

「お嬢ちゃんの犬？」

吾朗は、話しながら淡々と犬の身体に注射器を差し込んで、素早く抜いた。

「孫の琉美じゃ」

重三郎が言った。

「ああ、琉美ちゃんか。ずいぶん大きくなって、判んなかったさ」

吾朗は犬の麻酔が効くのを見計らいながら、再び琉美に向かって
「名前、なんての？」

「え？ 琉美です」

「いや、このハスキー犬の名前だよ」

「え？ な、名前ですか？」

「あれ？ 琉美ちゃんの犬じゃないの？」

吾朗は振り返って重三郎の顔を覗いた。

彼もまた、言葉に詰まっていた。

山で拾ったとも言いにくい。

「あ、あたしのです……」

琉美は思わずそう言ったものの、その後が続かなかった。

一瞬の沈黙があった。

『僕の名前は、ソラ』

「な、名前は、ソラです」

「ソラ？ へえ、ヤッパリ東京に住んでると洒落た名前になるんだ
ね」

吾朗はそう言って笑いながら、再び重三郎を見た。

「ブン太は、柴犬だからあれがあつとるわい」

「そうですよね」

吾朗は苦笑すると、犬の傷口付近の毛を電気バリカンで剃ってか
ら、そこへ軽くメスを入れた。

琉美は何だか不思議な気持ちで犬を見つめていた。

何？ 今あたしに聞こえた声は誰？ ソラ？ この犬がそう言っ
た……

ウソ、だって犬が話しかけるだなんて。

じゃあ、誰が名乗ったの？

琉美は、眠りに落ちたソラの顔を何時までも見つめていた。

犬の手当てが終わると、吾朗は和江が出した冷たい麦茶を飲みながらのん気に茶菓子を食べていた。

「ソラは、元気になるますか？」

琉美は吾朗の傍に来て心配そうに訊いた。

「ああ、大丈夫だね。外から見たほど化膿は酷くなかった。撃たれて間もないのかもしれない」

「しかし、銃声がすれば、この山全部に鳴り響くはずじゃが」

「今は狩猟の時期でもないし、何処かで撃たれたんでしょう」

重三郎の疑問に、吾朗は言った。

「ソラは、何処で見つけたんだい？」

「川の向こう」

「いなくなったのは何時？」

「えっ…と…」

「二、三日前さ。勝手に山さ行ってしまったんだ」

重三郎は、困った琉美の顔を見て、助け舟を出した。

「それじゃあ、その間に何処かで撃たれたんでしょうか。ハスキー犬なら、ずいぶん遠くまで遊びに行った事も考えられます」

そう言いながら、のん気に麦茶を飲む吾朗に向かって、重三郎は「お前、そんなにのんびりしていいのか？」

「いやあ、どうせ暇ですから。それに、最近はこの辺も携帯の電波が届くので何かあったら電話が来るんですよ」

吾朗はそう言って、ポケットから携帯を取り出して見せた。すると、途端にそれが鳴り出した。

「言ってる傍から、町で仕事が出来ました」

吾朗は電話を切るとそう言って笑いながら、鞆を手にした。

「ソラの目が覚めたら、あまり動かしないうようにして。栄養のあるものをあげれば直ぐによくなるから」

吾朗は、琉美にそう言い残して、車に乗り込んだ。

「おじいちゃん、ありがとう」

吾朗の車が見えなくなると、琉美はろくろを回しだした重三郎に言った。

「なあに、別にいいさ。しかし、何とも奇妙な犬じゃ」

「そうかな、なんだか賢そう」

琉美はそう言って、ソラの眠る土間を覗き込んだ。

「あもう、お昼どうします？」

和江が声を掛けてきた。

「そうじゃった。どうりで力が出んわけだ」

重三郎は、そう言いながらろくろを止めて立ち上がった。

「琉美もお腹が減ったべ。ささ、食べるべ」

遅い昼食を二人は食べた。

和江は、もう夕飯の仕込みをしていた。

「ねえ、犬って人の言葉が判るのかな？」

琉美がご飯を口に運びながら、訊いた。

「どうじゃろ。ブン太も、理解してるような、してないような」

重三郎はそう言って、ははっと笑った。

琉美は再び考えていた。

自分をソラと名乗ったあの声。

確かめたい。あの犬、ソラは本当に自分で名乗ったのか。そんな事があるのだろうか。

「そう言えば、ソラだなんて、ずいぶん風変わりな名前を付けたもんじゃな」

不意に重三郎が言った。

「う、うん。ぼら、何かここにいると毎日青い空ばかり見てたから」

「ああ、なるほどなあ」

重三郎は、そう言って頷くと、やけに感心していた。

そうだ、ソラって、本当は誰が付けたんだろう。やっぱり、青空のソラなのかな。

琉美はそんな疑問を感じながら、再び土間の方を眺めた。

白い三日月が淡く小さく輝き、頭上には天の川が流れていた。

澄んだ星空に、虫たちの声が森の囁きとなって吸い込まれていた。

「ブン太。あんたは、喋らないよね」

その晩、餌を貰うために犬小屋から出てきたブン太に、琉美はそう話しかけたが、ブン太は黒い瞳を輝かせてただ陽気にシッポを振るだけだった。

「ねえ、ソラ。あんたソラって言うんでしょ。ソラ」

ああ、もううるさいなあ。何だよこの人間の女は……

昨晚は、あまり食欲も無かったソラだが、今朝出された食事はキレイに残さず食べた。

土間に寝そべっていれば、外の灼熱は遮られてウソのように涼しかった。

琉美は、そんな寝そべるソラに、何度も話しかける。

しかし、ソラはそれに応える事はしなかった。

そつと薄目を開けて覗うソラを、琉美は好奇心に満ちた眼差しで見つめた。

……そんなに、ジッと見るなよ。

「ソラって何だか、若草のような匂いね」

何だそりゃ……

ソラは、いちいち琉美の言葉に、心の中で反応していた。

「まだそつとしておいた方が、いいじやろう」

重三郎が、やたらとソラを気に掛ける琉美に向かっていった。

「そうだね」

琉美はそう言って庭に出ると、熱い陽差を避けて縁の下にいたブン太に声を掛けた。

「ブン太と出かけてくるね」

重三郎にそう言って庭を抜けていく琉美を、ソラはこっそりと目で追っていた。

ブン太は、土間の入り口から僅かに見えるソラの鼻先を、チラリと見てから、庭を駆けて行った。

「あら、またお出かけ？」

あぜ道を横切ろうとした時、和江がちょうど昇って来たところだった。

「うん、ちょっとその辺まで」

琉美はそう言って、和江の持った籠を見て

「うわあ、とうもろこし」

「お昼の後にゆでとくから」

和江はそう言って笑うと

「もう直ぐお昼だからね」

「うん。直ぐに戻るよ」

琉美はそう言いながら、ブン太に咳かされるように駆けて行った。少し山を降りると、林の中に小さな畑が幾つかある。その殆どは村の人が個人で食べる為のものだ。トマトや、きゅうりやジャガイモ。大きなネットで囲われているのはとうもろこしだ。

琉美は畑の横に生えた自分の倍もありそうな大きなひまわりを眺めながら、その先の水田跡に向かった。

今は使われていない小さな水田は、自然の湧き水を利用していた為、溜池のようになって残っている。

どじょうやイモリやおたまじゃくし、そしてアメリカザリガニが、当たり前のようにうごめくその場所は、東京で育った琉美にはいかにも神秘的だ。

触るのは怖いが、見るのは好きだった。

得体の知れない生き物が、自分の意思で動き回る様は、なんとも不思議な光景だ。

こうして琉美は、一人でも都会には無い自然を堪能するのが好きだった。

「山の向こうで、賞金狙いがまた死んだそうですよ」

和江が、昼食の用意をする合間に、重三郎に言った。

「賞金狙いって、あのファングとか言われている奴かい」

「山犬とか、犬神とか言われていますね」

「犬神かあ。そりゃ、ワシも会ってみたいもんじゃ」

重三郎は、仕上がった器類を、窯に入れる準備をしていた。

「会ってみたいだなんて、あった時は死ぬ時ですよ」

和江は目を丸くしてそう言った。

「相手の命を狙うから、こっちの命を取られるんじゃ。わしや、ただ見てみたいだけじゃ」

重三郎は、そう言ってホホホッと、小気味よく笑った。

「そう言われてみれば、死んだ猟師って、みんな仲間の鉄砲で誤射してるんですよね」

「きつと、どえらく賢い犬神さんなんじゃろう」

会話をしながらも、和江は手際よくちゃぶ台に料理を並べていた。相変わらず土間に寝そべったソラは、耳を立ててそれを聞いているた。

その耳が、ピクリと動いた。

少しして、庭には琉美とブン太の姿が現れた。

「あああ、人間なんかと一緒に走って楽しいかね」
ブン太と琉美を見て、ソラは呟いた。

「ねえ、あそこの田んぼはどうしてもう使わないの」

琉美が、昼食をとりながら重三郎に訊いた。

「あそこは小さすぎるんだな。昔は、自分達で食べる分をあそこで作っていたんじゃない」

琉美は、そうめんを口へ運びながら

「ふうん」

すると今度は

「ねえ、池の中でイモリが泳いでた」

「イモリが？」

「うん」

少々首を傾げる重三郎に、琉美は頷く。

『バカだなあ。そりゃ、サンショウウオだ』

その声に琉美はハッと振り返って土間を見た。

「どうした？」

さっきの声。それは重三郎には聞こえなかったようだった。

「ううん。何でもない」

琉美は何食わぬ顔で、そうめんを器に取った。

食後には和江が、井戸で冷やしたスイカを切ってくれた。台所からは、ともろこしを茹でる甘い香りが漂っている。

琉美は土間の縁に腰掛けてソラの姿を眺めていた。

「ソラ、スイカ食べる？」

『んなもん食べないよ』

スイカに噛み付く琉美の口が、開いたまま止まった。

話しかけた琉美さえ、まさか返事が返ってくるとは思わなかったのだ。

彼女は土間へ降りて、ソラの目の前にしゃがむと

「やっぱり……人の言葉が解るのね」

しかし、ソラは両脚に顎を乗せたまま、目をつぶっている。

「いやあね、犬のくせに狸寝入りだなんて……」

琉美は、ソラの素っ気無い姿を見ると、再び土間を上がり縁側に行って腰掛けた。

気のせいかもしれない。

琉美自身そうは思ったが、それでも良かった。

ちよっぴり不思議なあのだが、この家にいるだけで、何だかワクワクした。

それが、気のせいでも何でも関係ない。

せつかくの夏休み。楽しい気分になれば、それでいいのだ。

「なあ、お前なんでそんなにひねくれてるんだ？」

ソラは誰かの声に薄目を開けた。

目の前には柴犬のブン太が、黒い鼻を薄っすらと濡らして座っていた。

ソラは黙ったまま彼を見つめると、再び目を閉じた。

「お前、何処から来たのか知らないけど、人間と暮らしてはいないな」

ソラは目を閉じたまま聞いているだけだった。

ブン太は、黒い鼻をクンクンと小さく動かした。

「お前、血の臭いがするな。これは人間の血だ」

ブン太は、少しだけ首を傾げると

「お前が思ってるほど、人間は嫌な生き物じゃないぜ」

「お前に何が解る」

ソラは、初めてブン太に言葉を返した。

「人間にシッポを振るお前に何が解るっていうんだよ」

ソラは瑠璃色の片目を開いて、ブン太を睨んだ。

「人間に何かされたんだな」

ブン太は小さく息をつく

「ここへ時々来る奴らにもおかしな連中はいるさ。でも、いい人間だって沢山いるぜ。現に、爺さんや和江や、毎年来る琉美はいい人間だ。お前の怪我を手当てした吾朗だってそうさ」

ソラは耳をピクリと動かして

「いい人間て何なんだよ」

「その人の笑顔を見ると、幸せになるんだ。その人の傍にいたいって思う人間さ」

「どうして人間の笑う顔を見てこっちまで幸せになるんだよ」

ソラは、ブン太から視線を外して庭の緑を眺めた。

庭の片隅で、琉美がマキ割りの手伝いをしているのが見えた。

「俺たちの遺伝子さ」

「遺伝子？」

再びソラはブン太を見つめた。

「遠い昔から、俺たちは人間と共に暮らし、お互いを癒してきた」
「癒す？」

「人間は俺たち獣を見て、心が癒されるらしい」

「じゃあ、どうして人間は獣を、僕たちを殺す？」

ブン太は目を細めると

「よほど酷い目に遭ったようだな……」

ソラは何も答えなかった。

「でもな、今にお前にも解るよ。人間の笑顔を見たいと思うようになる。それを見てお前は幸せな気持ちになる」

同じような事を、母さんや垂れ耳のおじさんも言っていた。ソラは、少しだけそんな事を思い出した。

しかし、それと同時に、あの夜の仲間の叫び声も思い出した。

「ならないよ。僕はならない」

「なるさ」

「どうして？」

「遺伝子だからさ」

ブン太はそう言って立ち上がると、グルグルとシッポを振りながら琉美の元へ駆けて行った。

◆11◆

緑が生い茂る庭に、一台の大きな車が乗り込んできた。

真っ白なボディが、真夏の太陽に照らされて光り輝いている。

運転席から蒼いアロハシャツを着た男が降りて来ると、素早く後ろのドアを開けた。

そのドアから大きな長い足が地面に突き出ると、次には大きな身体が姿を現した。

「やっぱり、山は涼しいな」

そんな言葉に、ドアを開けた男は

「そうですね」

と、かしこまった返事をする。

アロハシャツの男はいかにも下っ端といった風貌だった。

そしていくら山間は涼しいとはいえ、この暑さの中真っ白なスーツを着た男は、どう見ても風景には溶け込まない。

白いスーツの下には黒いシャツ、開け放たれた襟元には金とプラチナのネックチェーンがガラガラと光っていた。

スーツの男は大またに歩いて縁側へ近づくと、掛けていたサングラスを外して

「重三郎さん。この前の話考えてくれましたか？」

陰でろくろを回す重三郎は、男の方は見ずに

「何度来たって同じだ」

スーツの男は、軽く肩をすくめた。

「いい加減にしろよジジイ」

アロハシャツの男は、大きな声で吼えた。

「マサ、そんな声を出したら失礼だろう」

スーツの男が制する。

声を荒げる下っ端と、一見紳士的な親分。

よくあるパターンだ。

もちろん、大抵はタダの演出でしかなく、こういった連中で本当に紳士的な男は少ない。

「しかし、困ったなあ」

スーツの男はそう言っただけ空を見上げると

「夏休みで、お孫さんが来てるらしいですな」

その言葉に、重三郎の目の色が変わった。

「孫は関係なからう」

「いやいや。このままだと、そうもいかなるって事ですよ」

男は目を細めて笑うと、土間の陰から覗く琉美をチラリと見た。

獲物を狙う蛇のようなその視線に、琉美は出していた顔を、急に土間の中に引っ込めた。

「いいじゃないですか。一つぐらい作ってくださいよ。出来ないわけじゃあるまいし」

「出来ん」

重三郎はキツパリと言った。

「このジジイ！」

再び下っ端の男が怒鳴る。

「マサ、そんなに怒鳴ったら、お孫さんが怖がってるだろ」

スーツの男はそう言って再び土間の方を見ると、ゆっくりとそこへ向かって歩いた。

土間の暗がりには、ヌツと男の顔が覗く。

ソラはピクリと耳を動かして、片目を開けたが、寝そべったまま微動だにしない。

「リッパな犬だ。前は、いなかったね。お嬢さんの犬かい？」

琉美は男の問いには応えなかった。

スーツの男は不適な笑みを浮かべると、身を翻して
「マサ、行くぞ」

「へい」

と、下っ端はベントに駆け寄り後ろのドアを開ける。

「また明日来ますよ。この先に温泉が在るらしい」

スーツの男はそう言って目を細めて笑うと、サングラスをかけて、白いベントに乗り込んだ。

少し荒っぽいバックで向きを変えたベントは、そのまま山を降りていった。

「おじいちゃん、何なの？ あれ」

琉美が土間から出てきて、重三郎に訊いた。

「何処かの組の人間らしい。わしに、飾り器を造れとうるさくてな」

「組？ 飾り器？」

「新しく建てた事務所に置くらいしい」

重三郎はそう言うと

「琉美、明日は和江さんの所に行つてなさい」

「どうして？」

「どうしてもじゃ。ブン太とソラも連れて行きなさい」

◆12◆

琉美は、ブン太とソラをつれて和江の家に来ていた。

「なによ、あの狼みたいなのは」

「あれ、犬だって」

「あんな犬いるの？」

「チョー怖いよ。見た？ あの眼……」

「そうよね、ブン太はどうでもいいとして、何あの般若^{はんや}みたいな顔。反則よ」

「ていうか、首輪してくない？」

「そうよ、怖くてここから降りられやしないわ」

屋根の上に集まった猫たちの間では、珍客に対する苦情が殺到していた。

「何なんだろう、昨日の変な連中」

琉美は縁側に座り込んで外を眺めながら呟いた。

「何でも、重三郎さんに装飾器を造らせようと、来てるみたいよ」
麦茶を琉美に運んできた和江が言った。

「装飾器」

「飾る為の器だね」

和江も縁側に腰掛けると

「何でも、東京の何とか組っちゅうとこの親分が重三郎さんの陶器を気に入って、新築した事務所に飾りたいそうだがね」

「何とか組って、ヤ○ザ？」

「まあ、出された名刺には何とか興業って書いてあったども、そんなもんだべ」

和江はそう言って息をつくとき、自分の麦茶を飲んだ。

「重さんは、器は飾るもんでねえ、使う為のもんだって、何時も言ってるから……飾り器なんて造りたくないんだべ」

「うん。あたしもそれ、聞いたことある」

ソラとブン太は玄関先に寝そべっていた。

ふとソラが視線を向けたそこには、白いネズミが一匹走って来たところだった。家とその周辺に住み着く家ネズミだ。

ソラは何気にそれを見ただけだった。しかし、ネズミから見た彼のバイ・アイの眼光は何よりも鋭く感じた。

ネズミは突然足を止めると、ソラに向かって

「ち、ち、違うんです。私らも生きる為には仕方がないんです……」
手には大きなパンくずを持っていた。

ネズミはソラの視線だけで震え上がった。

「僕には関係ない事だよ。早く行きな」

ソラは、無感情にそう言って、ネズミから視線をそらした。

再び駆けて去って行くネズミの気配にようやく気付いたブン太が

「あ、ネズミだ。あのヤロウ、何か盗んだな」

その時、畑の先の県道に、昨日の白いベンツの姿が見えた。

それを見た琉美は、何だかいても立ってもいられなかった。

思わず、靴を履いて、走り出した。

「琉美ちゃん」

和江が呼び止めたが、琉美は立ち止まらなかった。

玄関先からパッと、琉美を追いかける二つの影があった。

「やれやれ……」

琉美を追いかけて飛び出したソラが呟いた。

「なんで、お前まで走り出すんだ？」

ブン太は自分と同時に飛び出したソラに声を掛けた。

「愚かな人間の行動が見れそうだからね」

ソラは、横目でブン太を見ながら

「あんたはなんだい？」

「琉美や爺さんが心配に決まってるだろ」

「へえ、そんなちんけな身体で役に立つのかい。あんたはせいぜい、人間に癒しとやらを与えるのが関の山だろ」

ブン太は走りながら、ピツと小石を横に弾いた。

「イテッ」

小石は、ソラの頬っぺたに勢い良くぶつかった。

息を切らせて琉美が重三郎の家に戻ると、庭先に白いベンツが見えた。

一端足を止めた琉美は

「おじいちゃん、何処？」

そう叫びながら、ゆっくりと家屋に近づく。

「造れんもんは造れん」

茶の間へ続く土間の方から声が聞こえた。

「おじいちゃん？」

琉美は土間から、家の中を覗き込んだ。

「琉美、どうして来た」

「なんか、心配で」

「いやいや、優しいお孫さんじゃないですか」

重三郎よりも手前の、茶の間の入り口に白いスーツの男は腰掛け
ていた。

「琉美、直ぐに和江さんの家へ戻りなさい」

重三郎が声を出した。

「でも……」

「大丈夫、心配ない」

「なに、せっかく来たんだからゆっくりしていったらいいじゃない
ですか」

白いスーツの男がそう言うと、後ろから下っ端の男が、琉美の背中を押した。

「やめろ、琉美に手を出すな」

ソラとブン太は、ベンツの陰に伏せて様子を覗っていた。

「見ろよ。何だかバカな人間丸出して所が見れそうだぜ」

「何をのん気な。琉美と爺さんが何だか危ないぞ」

「おい、まさか助けるってんじゃ無いだろうな」

ソラは、目を輝かせて笑った。

それを無視するかのようにな、ブン太は家屋に向かって歩き出した。

「私はこの仕事をうまくやらないと、降格になるかも知れないんだ。わかるかい？」

スーツの男は涼しい顔で、しかし、険しい眼光を放ちながら言った。

「判った、琉美を放せ」

スーツの男は、琉美の細い腕をしっかりと捕まえていた。

「こうしましょう。出来上がるまで、お孫さんを預かります。なに、夏休みはまだ長い」

「駄目だ。陶器は作る。琉美を放せ」

「いいですか、私は切羽詰っているんですよ」

その時、アロハシャツの下っ端の横をすり抜けたブン太が、スーツの男に飛び掛った。

「うわ！」

思わず琉美を放す。

グルルルル……温厚なブン太が牙を剥いて、スーツの男を威嚇する。

「琉美、こっちへ」

重三郎がそう言った時、下っ端が銃を構えた。

「この犬やろうがっ」

下っ端が引き金を引いた。

「ダメ！」

琉美は反射的にブン太に覆いかぶさった。

パンッ！

中国製のトカレフが、まるで花火のようなこざっぱりした音を奏でた。

しかし、銃口からは確かな青白い煙と硝煙の臭い。

琉美の脇腹から血が流れ、赤いTシャツを黒く染め出した。

「な、何てことをするんだ」

重三郎が叫んだ。

……あああ、ブン太の奴、琉美を助けるどころか、助けられてやる

土間の入り口付近の花壇の陰で様子を覗っていたソラは、呆れた顔で呟いた。

「そのガキが飛び込んだんだ。俺は犬を狙ったんだ」

下っ端が、震える声で叫んだ。

「どうします？ アナタが早く陶器を造らないから」

スーツの男は顔色一つ変えずに、寧ろ笑顔を浮かべて言った。

「琉美を病院へ」

「じゃあ、陶器を造ると一筆書いてください。あ、それから拇印も」
そう言っている間にも、琉美のシャツが黒々と染まっていく。

……しょうがねえな。一宿一飯の、いやそれ以上か……とにかく
恩返しと言う事にしておくか。

ソラはそう思いながら立ち上がり「僕のガラじゃないけど」

『おい、チンピラ！』

下っ端は後ろから聞こえた声にビククリして振り返った。

ガッ！

「うわあああ！」

一瞬の出来事だった。

ソラは彼の右手に噛み付いた。トカレフ事噛み千切らんばかりの

力だ。

「イテエ、放せ、放せ……」

銃が手から落ちて、男も土間の入り口に転がった。下っ端の手は、もう銃を拾える状態ではない。指の骨がバラバラだった。

ソラが下っ端を倒して土間に入ったとき、スーツの男が懷から手を出した。

その手に握られているのは中国製の粗悪なトカレフなんかではない。本物の拳銃。

高性能オートマチックのシグの銃口がソラを狙った。

高級なステンレスのボディがギリリと光った。

ドンッ！　ドンッ！

男は二度連続で素早くトリガーを引いた。

仕留める為の基本テクニクだ。

薬室から飛び出た空薬きょうが、勢い良く固い土の上にキンッ、キンッ、と音をたてて転がった。

ソラは素早く左に回避行動をとって、それをかわした。

兆弾で土間の土が小さく盛り上がる。

男は再び銃口をソラに定めようとする。が、一瞬速く、ソラは土間と茶の間の段差に足を掛けてスーツの男に飛び掛った。

ドンッ！

「クソッ」

弾丸は天井に向かって放たれた。

ソラが飛び掛った勢いで、男は仰向けに転がった。

そして、その手にはソラの鋭い牙が突き刺さっている。

グルルルル………グルルルルル

鼻を鳴らし、喉元から響く唸りにスーツの男は少なからず恐怖した。

「ちきしょう……」

男の左手が、スーツのポケットを探っていた。

取り出した飛び出し式のナイフを、ソラの身体に向かって構えた。
が、しかし

「イテッ」

その時、男は左手にも痛みが走って思わずナイフを落とした。
白い小さな生き物が、男の左手に噛み付いていた。

ソラは渾身の力で男の右手を深く噛んだ。彼の歯に男の手の骨の
感触が伝わった。

勝負は着いていた。

グルルルルル……『愚かな人間……』

ソラの声にスーツの男は目を見開いた。

「バカな……お前、化け物か……」

バキバキッ

「うぐうあああああ！」

次の瞬間、男の手の骨は碎けた。

「恩は返しましたよ。オオ犬さん」

白い家ネズミはソラに向かってそう言うと、チヨロチヨロと凄
勢いで、外に駆け出して行った。

その手にはしっかりとサツマイモの切れ端が握られていた。

『爺さん、早く救急車を呼べ！ 琉美がやばいぞ』

その声に重三郎も驚いた。

腰が抜けないのが不思議なくらいだった。

「そ、そんなバカな……」

『どうでもいいから早く電話しろ』

重三郎はソラに急かされながら、そんな自分を奇妙に思いながらも、孫の為に電話を手にとった。

ブン太は琉美の傍で、悲しく鼻を鳴らしていた。

ソラは琉美の傍に行くと、頬をそっと舐めた。

『大丈夫か、しっかりしろ』

「ソラ……助けてくれたの？」

『お前が、犬なんか助けるからだ』

「だって、ブン太はおじいちゃんの家族なんだよ」

『家族？』

「そうだよ。今はたった一匹の家族。だから、ブン太がいなくなったら、おじいちゃんが悲しむよ」

琉美はそう言って、ほんの少しだけソラに向かって微笑んだ。

「今は、あなたもそうでしょ、ソラ……」

琉美が横たわった下に小さな血溜まりが出来始めていた。

ソラは台所からタオルを咥えてくると、琉美の脇腹にあてがい

『傷口を強く抑えろ』

琉美の手をそっと咥えて傷口へ促す。

『琉美、しっかりしろ』

しかし、今の琉美にそんな力は無かった。

「わしが抑える」

重三郎が土間へ降りてきて、琉美の傷口を押さえた。

「琉美、しっかりしろ」

「なあって事だべ」

和江が駆けつけて来て、土間の入り口で叫んだ。
下っ端が手を押さえてもがいている。

「瀬垣さん、行きましよう。病院いかねえと」

下っ端はスーツの男を促して

「どけ！」

と和江を突き飛ばす。

外へ出た二人は急いでベントに乗り込んだ。

ソラは土間の先まで行って、二人をジッと睨んだ。

陽の光りに照らされたソラの青と瑠璃色の眼光に、二人の男は震えた。

「ソラ、もういい。あいつらは勝手にさせておけ」

重三郎がソラに言った。

上空にバタバタと爆音が轟いた。

少し離れた街からドクターヘリが来たのだ。

応急処置をしながら琉美はヘリに運び込まれて、爆音と風圧を残して飛び去った。

二匹の犬が緑の草木を掻き分けて走っていた。

「おいソラ、どうすんだよ」

ブン太が言った。

「病院へ行く」

「お前、琉美が運ばれる病院は山の向こうの町だぞ」

「じゃあ、お前は家にいろ」

ブン太は走りながら溜息をついた。

「道から外れて大丈夫なのか？」

「真っ直ぐ山を越えれば直ぐだ」

「真っ直ぐっておい……」

ブン太は再び息をついて「これだから野犬育ちは……」

そう言ってる間にも、二匹はどんどん草木をかき分け、獣道を横切る。

「アイタッ」

勢い良くソラがすり抜けた低い雑木の枝がブン太の顔に当たった。「おお、イテ。アイツ、足速すぎだぜ」

それでもブン太は、ソラを見失わないように全力で走っていた。ソラは、本当はもっと速く走ることができた。

しかし、ぎりぎりブン太が付いて来られるスピードを維持した。以前のソラなら、そんな事はしなかったかもしれない。

だいたい、人間の為に走るなんて、そんな事自体ソラがするはずは無かった。

夏の長い陽も暮れようとしていた。

山の尾根に沈む夕日が、緋色に変わった空をほんのりと紅く彩っていた。

ソラとブン太は町の病院へ着くと、敷地の端っこにある並木の陰に寝そべって建物を見つめていた。

「琉美大丈夫かなあ」

ブン太が呟いた。「でも、腹へったなあ」

ソラは、ただじっと建物を見上げていた。

確かにこの建物の中から、琉美の気配が感じられる。

気配がすると言う事は、彼女は死んではいないと言う事だ。

「あら、おめえら何処さ走って行ったと思ったら、こんな所まで来たのか」

和江だった。

ブン太は条件反射でシッポを激しく振りながら、和江に近づいた。「何だ、腹減ったべ」

和江はコンビで買ったおにぎりを、ブン太とソラに与えた。

「重さんに買ってきただも、まだあるから」

和江はそう言いながら、一心不乱におにぎりにかぶりつく二匹を眺めた。

「何だかおめえら、妙なコンビだなや」

「致命傷にはならなかったみたいです」

琉美をオペした医師が、重三郎に言った。

「じゃあ、琉美は大丈夫ですか」

「ええ、命に別状はないですよ。お腹の傷跡も、しばらくしてから整形してキレイに消せると思います」

医師は笑顔でそう告げると、今度は真剣な顔になって

「銃創ですから、警察に連絡しなければなりません」

「そりゃあ、そうじゃな」

重三郎はただ頷くだけだった。

中国やフィリピン製のトカレフは粗悪なモノが多く、使用した弾丸もおそらく安物で、火薬の量が少なかったのだろう。琉美に命中した弾丸は、彼女の肋骨に当たって殺傷力を失っていた。

しかし、スーツの男、瀬垣が放ったシグの9ミリ・パラベラム弾はそうはいかない。

軍隊でも正式採用されて、射速もはるかに速いその弾丸をソラがかわせたのは、殆どまぐれのようなものだった。

二日後、琉美はベッドに起き上がる事ができた。

「ほんと、無事でよかったよ」

毎日見舞いに来ている和江が言った。

「外にも留美ちゃんの回復を待ってる連中がいるわよ」

「えっ？」

和江は、琉美が起き上がれるようになったら言おうと思っていた。

琉美はゆつくりとベッドに起き上がると

「アイタタタ」

「大丈夫？ まだ無理じゃない？」

「大丈夫」

そう言って、和江に支えられながら静かに窓に近づいた。

「二匹とも、あそこから動かなくてね」

窓の下に見える並木の下には、ソラとブン太の姿があった。

二匹とも琉美の視線を感じ取って、耳をピクリと動かし窓を見上げた。

右目は蒼く、左目は瑠璃色に輝くソラの瞳が、三階の窓からものはつきりと見えた。

琉美は、小さく手を振った。

大きく振りたかったけど、脇腹の痛みでそれは無理だった。

トイレに行っていた琉美の母親が病室へ戻ってくると。

「琉美、まだ起き上がっちゃダメでしょ」

それを、聞いているのかいないのか、琉美は言った。

「お母さん、あたし治るまでここにいろよ」

「えっ？」

彼女は、少し回復したら東京の病院へ移る予定だった。ここでは母親が付き添うのも大変だ。

「でもねえ……」

母親は、浮かない顔で呟いた。

「大丈夫、お母さんは帰っていいよ」

「ええ？」

ソラとブン太はずっと病院の庭に居ついて、何時の間にか患者たちの間でも有名になっていた。

「あ、ワンワン今日もいるよ」

庭に出てきた小さな子供が言った。

母親と一緒にブン太に近づく。

ブン太もシッポを振って、子供にイイ顔をする。

「ケッ、人間におべんちゃら使って」

「バツカだな。ここの連中にはイイ顔しとかなないと、追い出されたらどうする」

ブン太はお菓子を頬張りながら

「それに、こんなにお菓子も食えるし」

飼い主の患者を見舞う忠犬として噂の二匹は、入院患者や見舞いに訪れた人たちから何かと食べ物を買うことが出来た。

「お前、ここに来て太ったんじゃないか？」

ソラは、そう言って、お菓子を食べるブン太を眺めた。

「あ、本当にいるよ」

また、誰かが近づいてきた。

「大っきい方はハスキー犬じゃない？」

「本当だ。あたし本物初めて見た」

噂を聞きつけた地元の女子高生だった。

なんだかうるさそうだな……

ソラは、さすがにうつとうしくなっていた。それでも、たいがい
は小さなブン太の方へ人気が集まる。

ソラは大きいし顔が怖い為、みんな触るのを躊躇するのだ。

ボフツと白い手がソラの頭に乗った。

「ちょっと、大丈夫？ 何か顔怖いよ」

一人の少女は、やはりソラの外観を怖がっている。しかし

「何言ってるの。ハスキー犬って、模様が怖いだけで意外とドジで
のん気な性格らしいよ」

もう一人の少女は臆する事無くソラの頭に手を乗せて、グリグリ

と撫でた。

……なっ、ど、ドジでのん気？ この僕が？
プクククク、とブン太が横で笑った。

一週間もすると、琉美は院内を歩けるまでに回復した。
裏庭の非常口で、琉美は久しぶりに二匹に会った。

ブン太は、誰に会うよりもシッポを振って彼女に近づいた。
「んん？ ブン太なんか太ってない？」

琉美は、そんなブン太の顔をグルグルと撫で回した。

「ソラ」

琉美の声に反応して、ソラは自分のシッポが勝手に揺れ動くのを
感じた。

……な、なんでシッポ振っちゃってるんだ、僕は……

「ソラ、おいで」

ソラは琉美に呼ばれるまま近づいた。
頭を撫でられると、気持ちよかった。

『怪我の具合はどうだい？』

「もう直ぐ退院だって」

『そりゃ、よかったな』

「ソラとブン太のお陰だよ」

『ブン太のせいで怪我したんだろ』

そう言ってソラは笑った。

◆16◆最終話

「ソラ、お前は どうする？　ここなら何時までもいていいんじゃないよ」

重三郎が縁側に腰掛けて言った。

「ごめんね、ソラ。ウチ賃貸だから犬は飼えないんだ」

琉美は、自分の荷物を鞆に詰め込んでいた。

無事退院した彼女は、今日東京へ帰る。

「こんなに長くここへいたのは初めてだね」

琉美は笑ってそう言う

「この辺にも学校があったら、あたし転校するんだけどな」

「そんなことしたら、わしが久子に怒られるわい」

久子とは重三郎の娘、つまり琉美の母親だ。

『僕は、少し旅に出るよ』

「ええっ、どうして？」

ソラの声に、琉美が言った。

『そうだな……琉美たち以外にどれだけいい人間がいるのかこの目で見たい』

「いい人間？」

『ああ』

「あたしたちって、いい人間なのかな？」

琉美はそう言って、少し首を傾げた。

『まあ、悪い人間じゃないって意味さ』

小道を車が登ってきて、庭に入って来た。

久子の車だ。

琉美の荷物を母親がトランクへ入れている。

「でも、また会える？」

琉美はソラの前にしゃがんだ。

『どうかな、約束は出来ないけど……』

「そう……」

『縁があればまた会えるさ』

「なあんか、犬の言う言葉じゃないね」

「何時でも、ここに来ていいからのう」

重三郎がタバコの煙を吐きながら言った。

『爺さん、その妙な煙を吸うのは止めた方がいいんじゃない？』

「これは、わしの長生きの秘訣じゃ」

そう言って笑う重三郎に向かって、ソラは肩をすくめたが人間には判らなかった。

「琉美、出るわよ」

荷物を積み終えた母親が、琉美を促した。

「じゃあ、またね。ソラ」

琉美は、バイバイと言おうとしてやめた。

ソラは黙って、琉美を見つめるだけだった。

その隣にブン太が来て琉美にシッポを振る。

「ブン太も元気でね」

車に乗り込んだ琉美は

「じゃあね、おじいちゃん」

「ああ、またな」

重三郎も笑顔で返す。

琉美を乗せた車は山を下って、国道へ出た。

「留美ちゃん」

和江がちょうど家の敷地から出てきたところで、大声で叫びながら手を振っていた。

「またね、和江さん」

琉美も窓を開けて手を振った。

夏の熱い風が、エアコンで冷やされた車内へ流れ込んだ。

車を一端止めて久子も笑顔で会釈をする。

「お父さんの事お願いします」

「まかしてけろ」

車に駆け寄った和江は、そう言って丸い顔で笑うと

「琉美ちゃん元気だな。身体、まだ無理すんでねえど」

「うん」

琉美は笑顔で頷いた。

「じゃあ、和江さんもお元気で」

久子はそう言ってもう一度頭を下げると、車を走らせた。

緑の山々が続く道が、琉美には名残惜しかった。

帰りは何時もこうだ。

東京になんか帰りたくない。何時もそう思ってしまう。

しばらく走ると、ずいぶん前に大雨で崩れ、岩肌が剥き出た山の斜面が見えた。

「あっ、もうあんな所に」

少し突き出た大きな岩の上には、ソラの姿があった。上空の風にあおられた背中の毛が銀色に輝いていた。

琉美は車の窓から顔を出してソラを見つめていた。

蒼い右目と瑠璃色の左目はキラキラと陽光に輝き彼女を優しく見下ろしていた。

（またね、ソラ。待ってるからね）

『そうだね。また』

琉美にははっきりと聞こえた気がした。

ソラは身を翻すと、緑の森に風のように消えていった。

銀色の残像だけが、そこには残っていた。

青い空と熱い風が、琉美の頬を優しくくすぐった。

◆16◆最終話（後書き）

【あとがき】最後までお付き合いいただいた方々に感謝いたします。
この作品は「大人も子供の楽しめるもの」として執筆を試みた作品
でした。現在、立志編を構想中ですので、いずれ連載したいと思います。
います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9210b/>

『ソラ』の旅～青雲編～

2010年10月8日14時48分発行